

## IoT 時代に必要な思考法

国際 P2M 学会副会長 中央大学大学院戦略経営研究科教授 山本秀男

クラウドコンピューティングという言葉がビジネス界に登場したのは、国際 P2M 学会が創設された翌年の 2006 年である<sup>1</sup>。それを契機に Google が App Engine、Amazon が EC2、Microsoft が Windows Azure の名称でサービスの提供を開始し、ICT (Information Communication Technology: 情報通信技術) はシステムとして「作る時代」から「使う時代」へと変化しはじめた。

作る時代は、モノを速く・安く・正確に作ることが重要であった。しかし使う時代には、何を、何時までに、誰のために使うかを考える(または知恵を出し合う)ことが重要になる。作る時代にはプロジェクトマネジメントが有効に機能したが、使う時代はそれだけでは不十分であろう。ICT を使ってどのような価値を創り出し、何をするかを考え、実行し、その結果を省察する「プログラママネジメント」が必要となる。そして、プログラムの価値を確実に実現するために、伝統的なプロジェクトマネジメントと連携した P2M (プロジェクト&プログラママネジメント) が重要になってくる。

技術の発展に伴い、システムのマネジメント形態は集中型と分散型が交

互に採用されてきた。情報通信では、30 年前は通信会社が集中管理するテレコムネットワークが社会の基盤であった。1990 年以降、多くのコンピュータが分散管理するインターネットが社会の基盤に変わった。そして、クラウドコンピューティングが普及し再び集中型に向かっている。

組織やシステムは集中と分散を繰り返しながら発展していくようだ。集中型は効率化を図るときに有効である。これに対して、分散型は様々な知恵を取り入れる発展過程で採用されることが多い。全てのモノがインターネットに接続される IoT (Internet of Things: モノのインターネット) 時代は集中型で良いのだろうか？

現在は、高齢化、貧富格差の拡大、市場のグローバル化、地域経済の疲弊など様々な問題を抱え、効率化すべきシステムと発展過程のものが混在している。そのため、全体と部分のそれぞれが受け取る価値のバランスを考えながら、集中型と分散型を使い分けるべきだろう。

不確実な環境で新製品・新サービスの研究開発や組織の変革を行うときは、何を何時までに誰と行うかを考え、着実に実行することが重要である。これからの IoT 時代には、誰かにコントロールされて勝手に動くモノを使うだけではなく、全体と部分のバランスを考える P2M の思考法を用い、個人が主体的にコントロールできる My Intelligence of Things (My IoT) を増やしていくべきではないだろうか。

---

<sup>1</sup> 2006 年 8 月 9 日に米国カリフォルニア州サンノゼ市で開催された Search Engine Strategies Conference で Google の CEO エリック・シュミットが使ったのが最初とされる。